

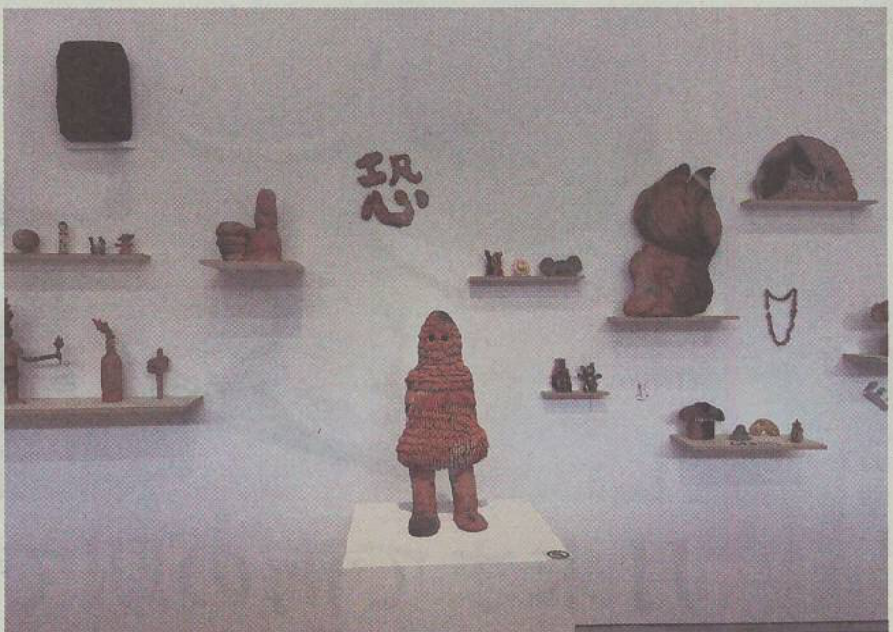
愛着や敬意を焼き込む

アートの現場から

ACCAC通信

国際芸術センター青森（ACCAC）では、しまうちみか個展「ゆるゆると火、めらめらと土」が開幕しました。彼女は、2021年6月からのアーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）プログラムに参加し、火にまつわる風習や人の高揚感についてのリサーチを基に制作を続けています。野外でのテラコッタ作品の焼成「野焼き」を公開・協働制作として行い、制作した新作を含め本展で発表しています。

ギャラリーに入って、一番最初に目に飛び込んでくるインスタレーション作品《My Alter》には、しまうちみかさんの青森での経験が大きく反映されています。彼女のテラコッタ作品だけではなく、火にまつわる道具や東北の玩具まで、青森市教育委員会が所蔵する文化財も含まれています。山や、不動明王



をイメージしたものなどに、荒行を含む津軽修験道の「火性三昧法会」を見た経験や、実際に行者さんから、火を扱う際の精神のコントロールについてお話を聞いた経験が反映されています。また、青森で見つかった特徴的な板状土偶を参考にした造形があったり、「雪山でケラを着た人に出会ったら人間か動物かわからないかも」と青森の冬を想像しながら生まれたテラコッタ作品《ケラケラくん》も登場します。タイトル《My Alter》は訳すと「私の祭壇」ですが、本作では、滞在中に得たイメージが遊び心をもった造形に落としこまれ、彼女の青森への愛着や興味そして敬意がユーモラスに表されています。

本展を通して、しまうち

みかさんが近年の制作において主軸とするテーマ「自立」という言葉を振り返ると、重力から逃れられない彫刻という表現方法とともに、私たちの「かくあるべき」と強迫観念に似た存在に関する意識についても考えさせられます。それは、在り方に対する問いであり、彫刻やドローイングを通して視覚的に考えさせてくれるのです。例えば同作品内の、「自立について」シリーズより《あそびせ》では、オシラサマの造形から他方を頼る在り方が参照されています。驚いた表情で見つめてくる本作は、時に躍起となって一人で生きようとする私たちに、存在に関する別の方法について示してくれるようです。

本展は、同名のアーティスト・イン・レジデンスの関連の展覧会です。しまうちみかさんの滞在は9月中旬までで、今後もリサーチと作品制作は続き、作品の追加も予定しています。9月4日（土）には、滞在制作の報告会となるトークも開催されますので、展覧会と併せて是非ご参加ください。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員 村上綾）

※第一金曜日掲載